

澄江堂——虹

小川 和佑

杳掛では激しい驟雨だったが、信濃追分の一里塚あたりで雲が切れた。光が射して来た。車が脇本陣油屋の前にとると、先に降りた澄江堂はさり気なくドアを手で支えて片山広子を導いた。それは彼女に海外生活の長かった夫の真次郎のそれをふっと思い出させた。秋蚕の季節だったので、この廃駅は桑の葉の青い匂いがする。江戸時代の最盛期には本陣、脇本陣をはじめ、問屋、旅籠、茶屋など百軒近く、飯盛女も三百人ほどもいて浅間三宿の一つとして賑っていたのだが、いまはその面影もわずかに脇本陣を囲む数軒が残るばかりだった。明治になって本陣はじめ幾つかの建物は岩村田に解体移築され、残された家々は荒れるにまかせて、もう長く住む人もないままに放置されているらしい。そのなかば毀れ

かかった家を取り囲むように、猛だけしいまでに繁茂した豆の花やとうもろこしが、いつそう家々の荒廃を際立たせている。いま、過ぎたばかりの驟雨で、すっかり元気づいたらしい馬追いが葉蔭の叢で鋭く啼いていた。

村の外れ升型の跡を出ると、そこは北国海道と中山道の分か去れだった。常夜燈があり、馬頭観音の石像や子抱き地藏などがこの分か去れを守るように並んでいる。そこに立つとずっと佐久平の方へ展望が開けていた。野のはてに虹が架っていた。広子は思わず、

「まあ、綺麗な虹……」と声を出していった。澄江堂は彼女と並んで鮮かな半円を描いて野に架かる虹に見入った。——美しい、確かに。しかし、あれは存在するが同時に非在なものだ。そんなものに憑かれるように俺は生きて疲れ過ぎた……。

「日本の古典ではこの美しい虹は凶兆なんです。」

その声は重く沈んでいた。

出座：昭和63年（1988）3月20日（日）第31回座会（神田神保町・五十嵐ビル）
初出：昭和63年（1988）4月号「短説」（通巻33号）
初刊：昭和63年（1988）7月1日『青いうたげ』昭和六三年度 年鑑短説集（第二巻）
再録：令和6年（2024）4月29日ブログ版「小川和佑先生著書目録」（海とユリ社刊）
〈<http://ogwkzsk.blog.fc2.com/blog-entry-105.html>〉
再録：令和6年（2024）9月20日「小川のせせらぎ／小川和佑ゼミナールOB会誌」第3号
Copyright (C) 1988 Ogawa Kazusuke All rights reserved.